

身近な自然環境・歴史的文化的環境・生活環境を保全・回復・創成する

NPO法人すいた市民環境会議

2006年5月 第45号

吹田の郷

発行/NPO法人すいた市民環境会議 事務局/〒564-0062大阪府吹田市垂水町3丁目8-28,106 TEL/090-8375-0647 FAX/06-6386-9491 中村小夜子
会長/小田忠文 ホームページ <http://www3.big.or.jp/%7EEsskk/sskk.htm> 設立/1997年3月15日 編集長/山本富雄
年会費/正会員(個人・団体)1,000円、正会員(法人)10,000円、購読会員1,000円、賛助会員10,000円 郵便払込口座番号/00980-3-28845



目次

| | | | |
|-------------|-------------------------|----|--------|
| コラム | 会長・小田忠文 | …… | 2頁 |
| ホームページ紹介 | 紫金山のツツジ | …… | 2頁 |
| すいたの古木・大木再訪 | 生もの委員会 | …… | 3頁 |
| 特別寄稿 | 島の環境容量 大阪学院大学教授 三輪信哉 | …… | 4～5頁 |
| | 生活環境委員会ニュース 生活環境委員会 | …… | 6～8頁 |
| | ご寄付をありがとうございます | …… | 9頁 |
| | ジャスコとの環境バスツアー報告 学習研修委員会 | …… | 10頁 |
| | 千里ニュータウンが博物館にやってきた 小田忠文 | …… | 11頁 |
| | 千里丘のキツネ その後 高畠耕一郎 | …… | 12～13頁 |
| | おいしかったです 間瀬敏江 | …… | 14頁 |



吹田市から委託され、まちなみ委員会が中心になり5年前に

作成した「あ・ルック吹田」を皆さんご存知と思う。これは、「遠くへ観光に行かずとも、近くでいいものがあるよ」「大きなお金を使わなくとも、自分の住むまちで憩いを求めることができるよ」「自分の住むまちをもっと知ろうよ」と呼びかけたかったもの。だからこそ、「観光マップ」としている。遠来の客のためのものであるが、むしろ市民のための観光マップなのである。▲今、全国的に自分たちの住むまちの自分たちのためのマップを作ることがブームになっているようである。吹田でも、「あ・ルック吹田」

は改訂、増刷を重ねている。市内の小中学校の図書室にも保存され、総合学習での地域調べにもよく活用されているようだ。そして、緑化公園室がつくった「ぶらっと吹田」が吹田市ではブームになっている。そのイベントには毎回参加者が多く、案内人が大変苦勞しているようである。▲今年度、まちなみ委員会は「あ・ルック吹田」を使用しての散策会を再開する。半日で歩けるコースは健康面から体にあまり負担がかからない。自分のまちを歩くのに、体に負担をかけず、しゅっちゅう歩くことがいいのではないだろうか。若者は自分の住むまちを知るために、高齢者は自らの健康のためにも皆様の参加をお待ちしている。

紫金山のツツジ

松林や雑木林のあいだをぬうように今年もコバノミツバツツジが紫の可憐な花をつけました（高島さんからの配信写真ですが）。カラー印刷でないのでその美しさをお伝えすることが出来ません。

どうぞホームページ (<http://www3.big.or>) をごらんになって下さい

いつのころからかわかりませんがこの花の色が地名になり「紫金山」と呼ばれるようになったとか聞きました。

この紫金山公園に昔の風景をとりもどすことは、もっとも時間とエネルギーが必要なのでしょうが「環境都市吹田」「これが吹田の自然ですよ」と日本に誇れるような紫金山公園にしたいものです。



すいたの古木・大木再訪

「古木・大木10年後調査プロジェクト」発足について

「いつも見ていた大木が、ある日突然切り倒されてさびしい」「吹田市に大木は何本あるのだろう」ということばがきっかけとなり、「吹田市内の古木・大木＝幹周り2m以上の木が何本あるか」の調査を「すいた市民環境会議」「吹田自然観察会」の協力により行ったのが9年前の1997年でした。その結果、幹周り2m以上の大木が420本、吹田市に予想以上に大きな木が数多くあることを知りました。大きな木にまつわる“はなし”の聞き取り調査と、「大木を見ながらの散策ルート」13コースを設定しまとめた小冊子とマップ『すいたの古木・大木』は、1998年3月に完成しました。

この散策コースはすいた市民環境会議により吹田の観光マップ「あろく吹田」に発展し、最近では緑化公園室による「ぶらっと吹田」に繋がっています。

すいた市民環境会議は大木調査に続いてツ



吹田市No.1の大木「関大のクスノキ」

バメ・ため池、ヒメボタル、生きもの、鎮守の森、街路樹、そして野草についての調査を、独自にあるい

は主要四公園の他団体と共同で調査し、結果をマップ化し公開してきました。

そして今回、古木・大木の10年後を再訪・再調査することにしました。再調査の主眼は

- ①10年前の大木がそのまま残っているか
- ②残っていない場合にそのわけは？
- ③無事に生き残るための条件は？

など、大木の10年後を確認することにあります。そして

- ④前回調査時に見逃していた樹
- ⑤10年間で幹周り2m以上に新しくランクされる樹
- ⑥大木のある場所

などを加え、すいたの大木に関する集大成を図りたいと思っています。

スケジュール的には前回調査から10年後となる2007年に本格調査を行うものとし、2006年は予備調査年として、

- イ) 前回調査のおさらい
 - ロ) 問題点の抽出
 - ハ) 調査方法の確定
- などを行う予定です。

以上、大木を再調査するための、「古木・大木10年後調査プロジェクト」をスタートいたしますので、ご協力をお願いします。

(生きもの委員会 平 軍二)

古木・大木10年後調査のための説明会開催

日時・場所 **6月11日(日) 13:30~15:30** 於:市民会館 NPO 室

内 容 1. 古木・大木について(仮題) 神戸大学 武田義明教授
すいた市民環境会議顧問
2. 大木10年後調査について

特別寄稿 島の環境容量

すいた市民環境会議顧問

大阪学院大学教授 三輪 信哉

「環境容量」という言葉があります。英語では carrying capacity とされたり、environmental capacity とされたりします。前者はたとえば牧草の一年間の生産量から永続的に飼うことのできる家畜の扶養能力や、ある海域の魚の永続的に漁業ができるときの漁獲量など、農林水産分野で用いられてきた言葉です。一定の面積に牛をたくさん飼いすぎると牧草が育たずやがて牛が飼えなくなるから、その牧場で何頭ならば永続的に飼育できるか、そのような環境がもつ能力を示しています。それを広げて、資源を提供したり、浄化したりする働きによって、人口や活動を支える能力として後者の英語が使われているようです。

さて、私はこの言葉を大学の恩師である末石富太郎先生（元阪大教授、環境工学）に教えていただきました。先生はこの概念を「都市環境の蘇生」（残念ながら絶版です）という著書の中で紹介されました。先生は、環境容量を4つの下位の概念に分けて説明しています。環境容量Ⅰは自然の浄化能力、環境容量Ⅱはその自然の浄化能力に加え、技術を用いた浄化能力、環境容量Ⅲはそれらから生み出される地域の活動や人口の支持能力、環境容量Ⅳはそれをさらに時間軸に沿って持続可能に続けた場合の積分的な能力、というものです。

環境分野は学際的な領域で、いつも生態学などの概念を借用していたので、とても斬新な概念でした。先生がこの環境容量の概念を提示されたのは、確か1975年のころでしたから、すでに30年以上の歳月を経ています。この概念の創始者は末石先生なのか、あるいは丹保憲二先生（前北大総長、衛生工学）であったのか、わかりません。丹保先生の概念は末石先生の概念でいうと、環境容量のⅠとⅡの説明で終わっているように私には思えます。

当時、修士1年であった私は、先生のご指導を得て、共著で「環境容量と地域計画」という、私にとっては初めての論文で、その4分の1を分担執筆させて頂きました。その際に、先生がハワイに環境容量をもとにした地域計画が存在することを私たちに紹介して下さい、共同執筆者である同期の友人とハワイの地域環境計画を勉強させて頂きました。当然、島ですから、四方海に囲まれているために、当時急速に発展した観光産業のすさまじい開発の勢いに、そのような考えかたを取り入れた計画が必要だとの認識がハワイで生まれてきたのもうなずけます。カネオヘ湾の上流域の住宅地計画の検討時に、閉鎖性水域である湾の自然の浄化能力から考えて、上流にある住宅からの汚濁物質の負荷総量から住宅戸数の上限を算出する、など、計画に盛り込まれたようです。

その後、環境容量という考え方は明確な定義を欠いたまま普及したように思います。末石先生の考えたような下位概念を用いて整理された環境容量ⅠからⅣという考え方は今は理解する研究者はほとんどいないようです。ただ、1980年代に入って「持続可能性 (sustainability)」や「ソフトパス(soft-path)」、「エコロジカルフットプリント」など、新しい考え方が生まれましたが、先生概念の中にすでに含まれていたように私には思えます。

さて、学生時代から旅好きであるということもあって、沖縄やハワイ、グアム、サイパンなど太平洋の島々が主なフィールドワークの場になりました。しばらく環境容量という言葉を意識せずに自分自身、来たのですが、この春に、まさに「環境容量」を意識させるような地域に出会いました。

沖縄県座間味島は本島那覇西方約40キロの海上にある面積約6平方キロ、人口638人の島です。戦争前後の鰹漁が盛んだった頃には大変経済的にも潤ったようです。その後、鰹漁が下火になり、主たる産業もなく、学校も中学校までしかないこともあって、人口は減少の一途を辿っていました。かつて、鰹漁のための餌探しに座間味島の周辺のさんご礁をくまなく知り尽くしていた若い漁業者が、目を現代に転ずるとまさに足元にエメラルドグリーンの人をひきつけてやまない観光資源がそこにあったのです。今は夏になると3ヶ月前から民宿は一杯になり、多数のダイバーが美しいさんご礁を満喫して帰ります。

しかし、観光業を盛んにするために、また生活の質を高めるためにはどうしても、島の大きさ、島の環境容量が制約となることは当然です。島もダイビング業者の方々がさんご礁の保全のためにオニヒトデ駆除を懸命にしているにもかかわらず、過剰なダイビングはさんご礁を痛め、観光資源としての持続性が維持できなくなります。当然、観光ダイバー人口の上限がありそうです。また、かつてより島は水に苦しむことがしばしばでした。集落の地下にある淡水レンズから取水したり雨水を溜めて利用する、ということが中心であった時代には、水汲みの苦勞、水不足の苦勞が絶えなかったことでしょう。電気が入り、ダムが建設され、下水道が完備しますと、観光でも生活でもひとりひとりの使う水の量はかつてとは比較にならないものになります。地球温暖化とともに、降水量が減少していると島のかたがたは言います。水消費量が増大する反面、降水量が減少すれば、観光にも響いてきます。また、島ではごみ問題に対処するために溶融炉を導入しました。なぜ小さな島に高度の技術と維持管理費を要する炉を入れたのか、と疑問視する声も聞こえてきますが、面積の限られた島に、廃水処理を完備した埋め立て処分場を広く取ることはかないません。ですから、未来を考えた場合、ごみを溶融し処分場の面積を減らしたい、そして土地を守り環境を守りたい、という願いから生まれたひとつの選択肢だったのでしょう。溶融炉自体も冷却塔に大量の水を使うという、水の容量との関係も深刻です。

このように、海の容量、土地の容量、水の容量と、いずれも何かしらの生活や活動の上限をもたらす制約でもあります。もうひとつ見えてくるのは観光で島の経済を立てていくためには良好な環境が必要であり、都会的な生活を求めながら良好な環境を守ろうとすると、支出も大きくなるということです。水道料金、下水道料金、一般廃棄物の処理費用など、村の財政、家計を圧迫します。だから、環境の持続可能性とともに経済・財政の持続可能性も一体として考えなければなりません。

これからの取るべき島の将来はどのようなものでしょうか？島の経済をリードする方々の意見として、「島の観光客数には上限がある、一時的には経済がよくても環境が荒廃し、やがて観光人口が減少すれば将来の子供たちの経済も成り立たない」との声も聞きます。むしろ、環境容量の制約を強く意識して島のひとびとが環境の制約を逆手にとって、環境の質の面でも、景観の面でも、島のライフスタイルも含めて洗練させ、『島の環境容量を意識したからこそ、環境を守ることを尊い理念として、ひとびとがライフスタイルの中に、あるいは経済活動の中に環境を尊ぶ精神性を輝かせる』、そしてそれがどこにもない地域の個性として輝き、それを楽しみとして永続的に観光客が訪れる、そんなあり方も可能でしょう。

どのようにすれば持続可能な島の環境を創造できるか、今、懸命にいろんな島の人々が話合っておられる姿を拝見するとき、人を魅了してやまないあの透明なさんごの海のように、美しく明るい未来があるように思います。

カンパへのご協力
ありがとうございます。
あと約5000円です!
(4月30日現在)

おかげさまで「古江台中学校市民共同発電所」は元気に発電しています。
(4/29 現在 発電総計 401kWh)

昨年夏に古江台中学校への設置を夢みてから、夢中になって駆け抜けてきた半年でした。
啓発・カンパ活動として市内各地のイベントで開催してきた
「おひさま広場」では、
市民のみなさんへ広く活動へのご理解とご協力をお願いしてきました。
みなさんの思いを、チカラを実感した日々でした。

「おひさま広場」開催報告

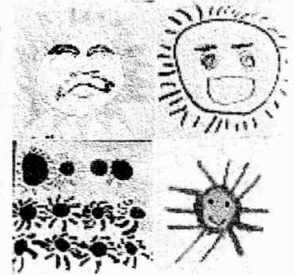
北千里ディオス夏祭り：北千里センター内／05-08-20

大変暑い一日
でしたが、子どもたちと太陽光
発電でまわる風車や、勢いよく
上がる噴水で太陽の力を実感。



花とみどりのフェア：江坂公園／05-10-22&23

大勢の子どもたちが“好みのおひさま”を描いてくれました。多くの人と“自然エネルギー”について語りあいました。



2005 生協まつり
千里南公園／05-11-06



あいにくの天候でソーラーグッズは威力を発揮できませんでしたが、古江台中学校に「ソーラー発電」の訴えに賛同してくださる方が多く、12,641 円のカンパをいただきました。

環境フェスタ2005
千里万博公園／05-11-12



紅葉の美しい万博公園、お祭り広場は「おひさま広場」に。

ネット・コム・フェスタ F.T.
古江台中学校／05-11-13



地域の幼稚園児から小中高生、そして大人たちも参加した大きなお祭りでした。

古江台中学校市民共同発電所お披露目の会・記念講演会 / 06-03-04

古江台中学校市民共同発電所が誕生した記念講演会を兼ね、見学会を開催しました。約70人の方々にご参加いただきました。

記念講演は、山田國廣さん(京都精華大学・人文学部環境社会学科教授)による「クイズで考える省エネでロハスなくらし」。「この5年、企業の二酸化炭素排出量は横ばいだが、庶民生活からの排出量は30%増加している。各個人がほんの少し環境に配慮した生活をするのが重要で、それは経済的に得になり、楽しいものである」とデータを説明。クイズをまじえた分かりやすい講演でした。

LOHAS (ロハス) とは、米国の社会学者ポール・レイ氏と心理学者シェリー・アンダーソン氏が提唱した Lifestyles Of Health And Sustainability の頭文字をつないだ造語で、「健康で持続可能なライフスタイル」を意味しています。



山田國廣教授



快晴のこの日、
発電量は1700W以上。

下記イベントでも見学しました。

★3月26日(日)
生きもの委員会主催
「春を食べる～野草の試食会」

★4月29日(土)
吹田博物館千里ニュータウン展企画
「おでかけイベント」

2階通路や装置の前で太陽光発電の説明

「古江台中学校市民共同発電所」設立にあたり、
ご尽力いただきました皆さまからメッセージをいただきました。

どうして、 古江台中学校に ソーラーシステムか

吹田市立古江台中学校

いのちの大切さ…肌で感じる子らに…………… 校長 横内 環

本校の敷地面積は、43,697㎡。緑被面積は10,992㎡、樹木本数は1,892本です。

(因みに、東京ドーム：46,755㎡ 甲子園球場：39,600㎡です。)自然環境に恵まれた学校です。100本近い桜の林は、春は木々にピンクの花びら、地上に桃色の絨毯、秋は赤や黄色の紅葉と地上にはペルシャ絨毯に変わります。校舎の中庭は、刈り込まれた草原が広がり、その中はたんぽぽの群生、一面の菜の花畑、チュウリップ、ダリヤ、ひまわり、コスモスなど四季折々変化しています。そこは、信州の乗鞍高原を思わせる趣です。子ども達は、このような自然を大いに享受しています。そこで、なぜビオトープづくりかと思われるでしょう。

本校の生徒は、卒業して高等学校や事業所に行き初めて、本校の環境の良さに気づくのです。在学当時は身近な自然のありがたさを実感していないのです。そこで、自然環境を受け身的に享受するのではなく、その自然環境の隠れた営みに気づき、理解を深め、環境を大切にする心を育むと共に、一人ひとりが環境の保全やより良い環境の創造のために主体的に行動する実践的な態度や資質・能力を培う必要があります。それは、いのちの大切さを学び、持続可能な



ビオトープをつくる古中の生徒たち

循環型社会の形成者を育むことに他ならないのです。そこで、「総合的な学習の時間」のなかで、ビオトープづくりや観察を通して、自然体系の循環を目で見て確かめ、肌で感じる体験が大切であると考えました。そのビオトープでは、水路を造り水を循環させるのにポンプを使っていたが、その動力は一般電気であります。そこで、その電源を循環型の電気エネルギーで補えればと、ソーラー発電による駆動をと考え、古江台中

学校市民共同発電所実行委員会設立へと発展しました。今まで環境教育への関心が遠かった生徒はもとより、PTA、NPO法人すいた環境会議、地域の方々、北千里専門店会等の協力を得て、半年近くで、200万円近くの募金が集まりました。このことは大凡2000人以上の方々のご協力の賜物だと感謝しております。

この活動を通して私たち子ども達は、環境教育とは、「人」と「人」、「人」と「自然」、「自然」と「自然」、「過去」と「現在」と「未来」との「つながり」「絆」であり、「畏敬の念」と「感謝の気持ち」であることを改めて実感いたしました。

熱意と協力の たまもの

平成17年度
古江台中学校PTA会長
近藤 智雄

平成17年度PTA会長の近藤と申します。この度の古中ソーラーシステム設置に対しての感想を述べさせていただきます。

まずは今回ソーラー発電の実施に御協力頂きました関係者の皆様。横内校長先生と古江台中学校先生方の皆様と、とりわけ計画立案から設置に至るまでお忙しい中多大なる御協力とご援助を

頂きました小田忠文会長を始めとするNPO法人すいた市民環境会議の皆様にご心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。皆様の熱意を持ったボランティア精神には本当に勉強させて頂きました。

また吹田市教育委員会を始めとする行政諸官庁の皆様のご指導にも感謝を申し上げます。

そして今回の計画にご賛同頂き、夢シールの特別扱いで心細い資金計画にご援助して頂いておりますディオス北千里専門店会の山本会長様に心よりのお礼を申しあげなければなりません。

資金の面では地域諸団体の皆様や市民、企業の皆様、古江台、津雲台の両小学校PTA役員の皆様にも当方の苦しい台所事情への御理解と御協力を頂きました。


他にもお礼を申しあげないといけない方はたくさんいらっしゃいますが、今回のソーラーシステム設置にはこのように数多いいろんな方々の御協力の賜物で実施にこぎつけた事を感謝する次第です。

本当は正直申し上げますとこの計画がスター

トした時の感想は、こんな短期間ではたして資金が集りうまくいくのだろうか？との気持ちが先にたちました。しかし計画を進めていく中で小田会長を始めとする、すいた市民環境会議の皆様の熱意に触発され、最後にはこの計画に参加できた事が大変嬉しく感じられました。自分が関わったプロジェクトが実体を伴って残るという榮譽にも恵まれました。

このソーラーシステムを学校で使用する電気の一部、また災害時の非常用電源として地域にも役立て将来につなげていく為に今後も微力ながら御協力したいと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

～大阪府の担当の方からメールをいただきました～



ほんとうに
いいのが
できたなあ～

大阪府 環境農林水産部 みどり・都市環境室
地球環境課 新エネルギー推進グループ
吉峯 主税

古江台中学校市民共同発電事業が無事完了いたしました。

思えば、補助を受けた各団体が、府民共同発電推進事業が成功するよう、試行錯誤を繰り返し、また年度内事業であったため、皆様方には大変お忙しい思いをさせただろうと思っております。

しかしながら、すいた市民環境会議様を始め、他の団体様も無事に事業が終了することができ、私共もこの上ない喜びであります。

また、すいた市民環境会議様は、地域と密着した本当に理想的な共同発電の形で、本事業を終了することができましたことは、ひとえにすいた市民環境会議様を始め、商店街、中学校、PTAなど、関係各位の多大なる努力の結果ではないかと思っております。

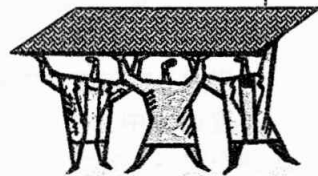
古江台中学校の太陽光発電も、順調に発電しているようで安心しました。

点灯式の写真も、古江台中学校の横内校長先生の許可を得、大阪府の環境の情報誌である「えこっと」の最新版にも写真を掲載させて頂きました。やはり、地上設置は身近に見られる上に、絵としても非常にきれいですね。結果的には、このほうが良かったかなと思っています。環境教育、非常用電源、地域コミュニケーション、商店街活性化にも役に立ちますし。また、千里ニュータウン展企画の見学会コースにも加わるとはすごいですね。そういう意味でも、今回の貴団体の共同発電事業は大成功だったのではないかと思います。非常に嬉しく思います。

今後も、吹田をソーラータウンに向けて、がんばって下さい。

こちらとしましても、できる限りの協力をさせていただきます。

本当に色々ありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。



P.S.

3月のお披露目会での「万博の太陽光発電の100分の1の規模ですが、古中の太陽光発電の方が、100倍の人が関わっている」という言葉には、ジーンとききました。

本当にいいのができたなあ～って感じでした。

ありがとうございます

吹田市立古江台中学校市民共同発電所とすいた市民環境会議への寄付を大勢の方々からいただきました。下記お名前をご紹介します。

すいた市民環境会議の会員・会員以外など順不同です。敬称は省略しました。

古江台中学校市民共同発電所への寄付 (1, 297, 442 円)

個人(匿名 10 人)

青木タミ子 浅田都司男 有川佳代子 筏隆臣 石川勝 石橋恒彦 市川貴美子 伊藤勝子
伊藤昌一 岩溪恭子 上田万吉 梅田茂 尾浦芙久子 逢坂久子 大澤浩子 岡村昇二 小川勉
奥谷英夫 奥山悦男 小田定子 小田忠文 海原登美子 香月利明 加藤俊二 河田晴一
川井悠子 河面堯 北野靖子 北村英一 木下嘉清 草野弘靖 栗本修滋 児玉恵美子
後藤紘海 後藤峯 佐藤和子 柴田晃 須賀井やすみ 菅井啓之 森田里美 森田真衣
田中紀美子 杉林百合子 杉本洋子 鈴木和子 鈴木たつ江 瀬川眞知子 高桑常子
高平里代 田口正巳 竹内美由紀 武田ゆき子 田澤修一 高畠耕一郎 田中一子
田中隆三 田中宏 近友安久留 千代延明憲 辻村恵子 土志田新八 出原正道 直田春夫
中井桂子 中川昌弘 中谷佳暉 中本智子 西川整子 西仲弘子 丹羽ミネ子 熨斗佳代子
長谷川達海 東輝夫 彦坂利久 平川恵一 平軍二 平田敏 平田雅利 廣瀬貞雄 伏木章
古谷啓伸 松浦登美枝 松浦一志 松岡要三 水井賢治 水本玉恵 美濃部剛 宮阪信次
武藤正治 邑本恵子 門田悦子 山田國廣 山本富雄 横内環 蓬田理恵子 龍池妃都美
企業・団体(匿名 1 件)

あさひ自転車 大幸薬品(株) 榊札幌造園 古江台テニスクラブ (財)大阪バイオサイエンス研究所
古江台連合自治協議会 千里山生活協同組合環境委員会一同 大阪自然環境保全協会
エコ・アクション 知床関西支部 日産プリンス大阪千里店 ピーエージーインポート(株)ホルボカズ千里
ディオス北千里専門店会

すいた市民環境会議への寄付 (35, 000 円) (匿名 1 名)

川井悠子 北野靖子 海原登美子 上田万吉 草野弘靖 柴田晃 杉林百合子 逢坂久子
梅田茂 田中夏美 後藤峯 北村正子 平田敏 松浦一志 前屋舗弘之 田中宏 水井賢治
エコクッキング有志

市民共同発電所へは、このほかにも、多くのお名前の確認できないの方々からご寄付を
いただきました。 ありがとうございます。

おしらせ

また 未来のために今 できること
環境教育フェア 2006

当会は
ハロウィーン展示
活動事例発表
係りに参加

日時 平成 18 年 6 月 17 日(土) 10 時から 16 時まで
会場 メインアター(吹田市文化会館) 阪急電車吹田駅すぐ
駐車場はございませんので、電車、バス等をご利用ください。
主催 すいた環境教育フェア実行委員会、吹田市

2006年 ジャスコとの環境バスツアー報告

学習研修委員会

高島 耕一郎

4/8(土)に「2006年イオン・すいた市民環境会議 環境バスツアー」を参加者52名で実施しました。今回は、大阪府の子ども施設「ビッグバン」にも行くため、子どもの参加も多くなりました。この環境バスツアーの目的は、環境問題を子どもと大人が体験学習をすることと、この取り組みですいた市民環境会議とイオン(ジャスコ)の協力関係を築くことです。

行きのバス内では、すいた市民環境会議が最近取り組んだ「古中ソーラ」のビデオをみてもらいました。1時間ほどで、狭山池博物館に行きました。

大阪狭山市の狭山池は、7世紀の初めころに誕生した日本最古のダム式のため池で、約1400年の歴史をもっています。狭山池では、平成の改修にともなう発掘調査で、各時代の改修を象徴する堤や樋などの貴重な土木遺跡が見つかりました。

大阪府立狭山池博物館ではこれらの土木遺跡を展示して、「治水」や「かんがい」の歴史をわかりやすく紹介しています。安藤忠雄氏が設計した博物館に入る前には、水のカーテンを通りました。学芸員の馬場さんから楽しくダムの説明を受けたあと、館内を見学しました。

その後、狭山池に隣接する狭山副池で狭山市民が参画して作ったビオトープの見学をしました。「副池自然づくりの会」の勝部さんたちが案内してくださいました。ビオトープをつくり、維持していくことの難しさを説明してくださいました。また、参加市民の意識も多様なので、統一した取り組みの必要性も語っていただきました。

午後からは、狭山池からバスで15分ほどのところにある大阪府立大型児童館「ビッグバン」で遊びました。子どもはもちろん大喜びで見学したり、遊んだりしていましたが、昭和30年代の民家や商家が再現された実物大ジオラマでは、大人が楽しみました。

予定より少し早く、4:30には、南千里駅前解散することができました。



千里ニュータウンが博物館にやってきた

小田忠文（内本町）

吹田市立博物館をご存じだろうか。はじめて博物館に行った人は紫金山公園の一角に突然巨大な建物が現れ度肝を抜かれる。

吹田市が2003(平15)年11月～12月におこなった「市民の生涯学習に関する調査報告書」によると市立博物館を「よく利用する」1%、「利用したことがある」25%、「知っているが利用したことはない」49%、「知らなかった」25%とある。市民の四分之三が博物館に、行ったことがないことになる。平成14年の入館者(入館者+講座などのイベント参加者)は1万2千余人とのことである。月平均千人の入館者だ。

誰しも「このままでいいのだろうか」と思うだろう。市長が平成16年に国立民族学博物館から小山修三氏を館長として招いてから事態は変わってきた。館長の意向で昨年の春期特別展は市民の参加が求められ、私もその一翼を担う機会を得た。

特別展が終った夏から有志で「博物館を盛り上げる会」が結成され毎月話し合いを持ち、「平成18年の春期特別展は市民が企画、運営するものにしよう」となった。テーマは「千里ニュータウン展(以下、NT展)」と既に決まっていたので博物館とも話し合い、吹田と豊中の市報でNT展を企画、運営する市民委員を公募してもらった。両市から合わせて44人の委員が応募し採用された。平成17年9月から市民委員会が重ねられ、展示、催事、広報の三つの部会で企画立案作業が行われた。全体会、部会、連絡会などを合わせると毎週何かの会議が開かれていたことになる。合言葉は「人が来てナンボ」。そのためには展示の充実は当

然のこととして、集客を図るための催事、つまり興味を引くイベントをいかに設けるか、そしていかに広報するかが半年間、話しあわれ検討された。建て替えて壊される公団住宅を使って当時の生活を再現するサテライト館を作ろう。「千里再発見」と題した散策会もしようなどと企画は進んだ。

そして4月22日の開幕を迎えた。いつもは閑散としている博物館前の広場に大勢の人たちが集まった。開会式の後、この日は無料開放になった展示室は心齋橋通りのようにごったがえしていた。そして良い感想を語ってくださるお客さんが圧倒的に多いことを見て「成功だ」と感じた。商売の秘訣は「客が客を呼ぶこと」である。思った通りその後も来館者数に衰えはなく開幕3週間で入館者+サテライト入館者+イベント参加者の合計が1万人を超えた。最終的な人数はこの原稿を書いている時点では不明だが、2万人近くになるだろう。

展示や企画、運営を市民たちがするという全国でも珍しい試みを成し遂げた市民委員の元気さを見ていると「千里ニュータウンはオールドタウン」と揶揄されてきたが、なんのなんの、ますます元気なニュータウンになっていくと確信した。それにしても公募で集まった44人の市民委員の中にすいた市民環境会議の会員が12人もいたことに感激している。

NT展は6月4日まで開かれています。まだ見ていない方はぜひ博物館に足を運んでください。NT展ブログも面白いです。吹田市立博物館のホームページからNT展ブログに入ってください。

＜吹田千里丘の旧日生社宅地跡にいる

キツネ、その後報告＞

高島 耕一郎

吹田市千里丘の旧日本生命社宅地跡に生息していたキツネについて、すいた市民環境会議と吹田自然観察会は日本生命と、その保護対策についての話し合いをしてきた。

その報告は、2005年春に両会の会報誌に発表したが、その後の動きについて報告する。

2004年3月1日に以下の確認書を日本生命と吹田自然観察会、すいた市民環境会議、三者の代表者名で取り交わした。

『①日本生命は、吹田自然観察会、すいた市民環境会議の要望に対応して本件調査を行うものとする。②この土地を第三者に売却する場合は、キツネ調査結果を正確かつ誠実に当該売却先に伝えるものとする。③調査実施にあたりキツネの生息に十分配慮する。④調査に係わる費用は、日本生命が負担する。』

そのキツネ調査は、仲介者である吹田市地球環境課が推薦する会にするということでも合意し、実際の調査が約1年間かけて行われた。

2005年3月29日に、このキツネ調査の報告会が開かれた。出席は、吹田市環境室から2名、調査会社1名、日生1名、地元から1名、NPOから7名だった。

その内容は、当初予定していたキツネを捕獲して追跡調査をすることはできなかったが、痕跡、糞分析による食性、周辺環境調査などが行われた。

そして①2頭以上のキツネが対象地を利用している。

②対象地では過去に繁殖（子育て）が行われた。

③キツネはC団地跡地、D団地跡地および雑木林の北半分程度をよく利用していた。

④キツネは対象地だけを行動圏にしていたわけでもなく、また野生動植物を採食していることから餌付けの餌に100%依存しているわけでもない。

⑤キツネは昆虫などを捕食する一方、ゴミも採食している。

⑥キツネは緑地帯を利用して万博公園など、近隣の緑地帯に移動することができる。

⑦対象地に出没しているキツネの警戒心は強い。

⑧キツネの正確な行動範囲、移動ルートはなお、不明であるというものであった。

地球環境課からは、吹田市としても、これで終わりではないと考えているが、これからは、都市整備部開発調整課が中心になるだろう。

地球環境課が、今までのようなNPOと民間会社との仲介をすることはないと報告があった。

そのため、NPO側としては独自に、日生は土地売却先の会社との話し合いをしていただけことを要求した。

それは、2005年4月11日にすぐ実現し、日本生命が売却した土地購入者であり大規模住宅建設者である、日本エスコンの社員と話し合いが行われた。

日本エスコンからは、住宅事業本部本部長と事業担当者、近隣対策専門会社1名の計3人。環境NPO側は、吹田自然観察会、すいた市民環境会議から計5人、地元から1名が参

加した。

建設予定地の計画書では住宅の有効宅地 50%、道路、公園用地が 50%であることが示された。

真ん中に、キツネが棲息していた緑地を大きく残す図面になっていた。

そしてそれらは吹田市に帰属させる予定だとの報告もあった。

我々は、キツネには一定の配慮がされた計画と判断したが、①キツネが自由に動ける緑の回廊をつくる。

入り口が提供公園では、キツネが入りにくいので配慮が必要。

②自然緑地は、そのままの状態に残す。時期をみて、里山的な管理も必要ではないか。

③自然公園に、一定のフェンスで人間を侵入させない場所をつくる必要がある。などを口頭で伝えた。

その後、お互いに接触はないままに、旧日生社宅跡地は更地になり、2006年3月1日からは本格的な建設工事が始まった。

今年もキツネが棲息し、さらに子育てをしている姿を近隣住民が目撃している。

しかし、工事周辺は完全立ち入り禁止になっており、頑丈なフェンスで囲まれていてキツネに近づけない状態である。

以上



「お詫びと訂正」

前44号10頁関西大学探訪記最終行が「開かれた大学」を再認識した素…で終わってしまいました正しくは再認識した素晴らしい一日でした。…です。お詫びし訂正いたします。

「春日野に煙立つ見ゆ 娘子（おとめ）らし 春野のうはぎ 摘みて煮るらし」と、万葉集にあるのを知り、「若菜摘み」とやらを自分も体験したいと思い、参加しました。「野草」って、一体どんなものなのかもわかっていなかったんで、実際に平さんから教えていただきながらの採取は、驚きの連続でした。

野草と言え、土筆か、ヨモギぐらいしか知らない私は、思わず「これが野草？雑草じゃないの？」と、内心不安でいっぱい。「これが食べられるのかな？」という疑問です。

しかし、参加された皆さんは私と違って何回か参加されたことがあると見えて、淡々と且つ、楽しそうに「これは、ナズナ。これは、ノゲシ。これは、ヒメオドリコソウ」などと、草の名前を言いながら、どんどん袋をいっぱいにしていきます。

しかし私は、ノゲシを摘みながらも、葉がとげとげしているので、「これを食べるのだけはやめたいな」なんてことばかり考えていました。

実際の調理は古江台中学校の調理室をお借りしての実習でした。

ベテラン主婦の参加が多かったせいか、どれもおいしくできて、最初の不安はどこへやら、最後まで口を動かしていたのは私だったような…。

今回知ったことは、ほとんどの野草はてんぷらにするとおいしいということでした。それと、案外おいしいと思ったのは、「セイ

タカアワダチソウ」と「ノゲシ」。

てんぷらにすると、どの野草も同じ味がするのには、「セイタカアワダチソウ」だけはしっかりと固有の味がするのです。自己を主張していました。

今まで、イメージだけで「セイタカアワダチソウ」を悪者扱いしていましたが、今回の試食会で存在を見直した次第です。

ノゲシは煮びたしで食しましたが、とげとげの心配は皆無で、とてもおいしかったです。

「春日野のおとめ」ではないけれど、気持ちだけはおとめのように、楽しく若菜摘みを体験でき、春のいのちをいただけたことが、とても嬉しかったです。

天変地異がきても、野草を食べれば私は生き残れるかもしれないと、そんなことを思いながら帰途につきました。

来年も参加して、春のエネルギーをいただきたいと思います。

*うはぎ***ヨメナのこと

美味しそうな料理



編集後記

97年6月の創刊号から数えて10年目にさしかかった当会の顔「吹田の郷」45号を（失敗を演じながら）お届け出来ることを嬉しく思う。

☆当時の会長抱負の一部抜粋

「施設の計画段階で市民と行政そして事業者も含め話し合っていく」このようにして私達の住みやすい、また故郷として自慢できる吹田を作っていくと思っています……

「このままでは吹田はどうなるか」と案ずるだけでなく共に一歩踏み出しましょう……とあった。10年目の坂道どんな道であったとしても楽しく登って満10年としたいですね。